

---

# メカニックス

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

メカニック

### 【Nコード】

N1943E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

終戦直後。海軍の技術者だった森本と香川は祖国の復興を誓い合う。しかし彼等には一つわからないことがあった。それは何か。終戦直後の復興における一幕のお話です。

## 第一章

### メカニック

二人がいた場所は空港だった。何も無い空港だった。青空と格納庫が見えるだけだ。滑走路は破壊され飛行機も見えない。何もなかった。

「終わったのか」  
「ああ」

二人はその滑走路の真ん中にながら話していた。そのすぐ側に大きな穴が空いている。爆撃で空いた穴だ。他にも穴があちこちにある。

「降伏した」  
一人の男が述べた。やつれた赤い顔をしている。

「連合国にな」  
「そうか、遂にか」  
太い眉の男がそれに応えた。

「終わったのか」  
「終わった。負けた」  
やつれた男が言った。

「連合国にな」  
「わかつてはいたがな」  
眉の太い男はそれを聞いて静かに呟いた。青い空をずっと見ながら。

二人は海軍の技術将校なのだ。やつれた男の名は森本康雅、眉の太い男は香川篤という。階級は共に技術大尉であり同じ歳でもあるのだ。

「それでもな。負けたと聞くと」  
「悔しいか」  
「貴様はどうだ？」

香川は森本に問い返した。

「悔しいか。どうだ？」

「悔しくない筈がない」

森本はこう答えた。

「俺達は負けた。俺達の技術がな」

「どうして負けたと思う？」

「わからん」

香川の問いへの返答は返答になってはいなかった。しかしそれは偽りではなかった。

「技術力で劣っていたのか？」

「それはない」

彼等にも自信がある。それが教えていた。

「少なくとも俺達が開発してきた航空機は性能は悪くなかった」

「そうだ」

森本はまた答えた。

「エンジンも何もかも。アメリカのそれに劣ってはいなかった筈だ」

「では何故負けた。数か」

香川もまた問う。彼もそれが何故か考えていた。

「俺達が負けたのは。やはりそれか」

「わからん」

またしても森本の返答は返答になってはいなかった。しかしここでも彼は嘘をついてはいなかった。あくまで本音の言葉であった。

あり続けていた。

「しかし。負けはしたが」

「そうだ」

香川も言った。

「また。勝ってみせる」

「そうだ。一度や二度負けた位でだ」

ここでの二人の考えは同じだった。敗戦を受けてもまた戦いを挑むつもりだったのだ。

「しかしだ。同じことを繰り返してはまた敗れる」  
「そうだ」

敗戦には必ず理由がある。彼等はそれもまたよくわかっていたのだ。

「数で劣るのなら国力をあげる」

「数はな」

「しかし。それ以外にあるのなら」

それが問題であった。アメリカにあり日本にないものは何か。それを見つけない限り次の戦いで日本の勝利はない。そう確信していた。

「だから。学ぶぞ」

「勝つ為にだな」

「そうだ」

こつ言葉を交えさせて誓い合った。昭和二十年八月十五日のことである。その中で誓い合い次の勝利を見据えるのだった。

それから二年後。日本は連合軍の占領下に置かれまずは復興していると云えないこともなかった。しかし戦いの傷跡は深くそれから立ち直るのは不可能だとさえ言われていた。しかしその中で森本と香川は航空会社に入りそこで技術者として活動していた。それと共にアメリカの技術を貪欲に学んでいたのであった。

彼等が今勤めている工場で。油まみれの顔と作業服に身を包んだまま二人は話をしていた。もう外は真つ暗になっており残っている者は誰もいない。その中で話をするのだった。

「何かわかったか」

「ああ」

香川は森本の言葉に頷いていた。

「やはりアメリカの国力は凄い」

「そうだな」

これはよく認識していた。だから頷くことができた。

「これに追いつくことは困難ではないだろうな」

「やはりそうか」

「しかし近付くことはできる」

森本は言った。粗末な今にも壊れそうな木造りの机に向かい合っ  
て座りながら話し込んでいる。上の電球が弱い光を放っている。

「できるだけな」

「近付くことはか」

「そうだ。それでだ」

森本はさらに言う。

「アメリカの生産体制は日本とは全く違う」

「どうなっているのだ？」

「我が国は多くの種類のものを作っていたな」

「ああ」

香川もそれは知っていた。これは陸軍も海軍も同じであった。彼  
等がいた海軍も。

## 第二章

「だがアメリカは違う。最低限の種類のを大量生産する」

「最低限か」

「戦闘機なら最高で四種類か五種類か」

「それだけか」

香川はそれを聞いて少し驚いた。海軍ではそれこそ十種類は作っていたからだ。

「そうだ。その方が多くのものを生産できる」

「そうだな。確かにな」

一つのものに集中させればそれだけ多くのものを作れる。これは自明の理であった。

「性能のいいものを選んでそれを集中的に作るんだ」

「それだな」

「そう、まずはそれだ」

一つの答えが出た。

「それで多くのものを作る。まずはそれだ」

「それか」

「あとアメリカ自体の技術だがな」

それについても話すのだった。

「確かに凄い。しかし同じもの、時には越えるものを開発できる」

「越えるものをか」

「考えてみる」

森本は香川を見据えて言うのだった。

「俺達は何を作ってきた。零戦に紫電だ」

「ああ」

海軍の誇る戦闘機だ。彼等は何にも多くのものを開発してきた。

そこには絶対の自信がある。その自負を忘れていないわけではないのだ。

「アメリカの戦闘機にも負けてはいなかった筈だな」

「そうだ。性能では負けてはいない」

その確信を香川も述べる。

「しかしだ。数だけじゃなかった」

それと共にこれも言う。

「何かが足りなかつたんだ。それは何だ」

「技術だけじゃなくか」

「そうだ」

それに気付こうとしていたのだ。

「最低限の品種を大量生産する。しかしそれだけでもない」

「では何だ、それは」

「わからない」

香川はこう述べて首を横に振るだけだった。

「何なのかな。しかしだ」

「しかし？」

それでも一つ気になることがあった。それだった。

「アメリカ軍の兵器の稼働率はかなり高い」

「！？そうなのか」

森本はそれを聞いて目を鋭くさせた。これは彼の気付かないことであつた。

「ああ。我が国のそれよりもずっとな」

「整備兵に問題はない筈だ」

森本はまずは整備兵について言及した。彼等にも絶対の信頼を置いていた。

「彼等は優秀で真面目だ。だから」

「そうだ」

そしてそれは香川も知っていることだった。否定できるものではない。

「彼等もその力を存分に出している。確かにな」

「では一体何だ」

森本にはわからない。だからこそ問い返す。

「整備ではないのなら」

「設計ではどれも故障の多い兵器も部品もない」

「うむ」

それも自信があつた。これは自分達の主観だけでなく同盟国のドイツ軍からも言われていたし最近ではアメリカ軍にも言われている。日本の技術による兵器は確かに素晴らしいと。

しかしここで香川はあることに気付いたのだ。ドイツ人は手放しであつたがアメリカ人は高評価の中にも含んだものがあつた。そこが引つ掛かつていたのである。

それが何かと考えていた。そしてそれを森本に話しているのである。

「ではそれが何かだ」

「わからないんだな、まだ」

「ああ。しかしこれだけは言える」

香川はまた言った。

「これについてはアメリカ軍が知っている」

「あの連中がか」

「盗むぞ」

香川の目がここで光つた。

「それが何なのかな」

「盗むのか」

「ああ、盗む」

また言った。

「そこに答えがあるのなら。何だつてやってやる」

「今度の戦争で勝つ為だな」

「何が戦争放棄だ」

最近新しくできた憲法のことだ。

「戦争は武器を使ってだけじゃない。他にもある」

「そうだな。俺達の戦争はその武器を造ることだった」

そうした戦争もあるのだ。そして今度の彼等の戦争は。

「今度は武器じゃないな。製品つてやつか」

「それを売って儲けてアメリカに勝つ戦争みたいなんだ」

「そうだな。その為には」

「アメリカからその何かを盗む」

また言葉が強くなった。

「何としてもな。今度は負けてたまるか」

「糞っ、しかもだ」

ここで森本は齒噛みした顔になった。嫌なものを思い出す顔であった。

### 第三章

「最近アカだの何だのが出て来ているしな」

「ソ連はそれ以前だ」

香川もまた森本と同じ顔になった。まるで親の敵を思うようにだ。

「あんな連中が平和勢力なものか」

「満州を見ていないのか」

口々に言うのだった。二人で。

「狙っているぞ、我が国を」

「ああ」

二人はそれを確信していた。何処までもソ連を憎み嫌っていた。

彼等の中ではソ連は『平和勢力』なぞではない。そしてその見方は当たっていた。

「あいつ等を退ける為にも。わかるな」

「ああ、わかっている」

また香川の言葉に頷く。

「盗むか。アメリカから」

「そうだ」

それをあらためて言い合うのだった。それからも彼等の努力は続いた。そしてその結果。アメリカの工場について学んでいくうちにあることに気付いた。やはり大量生産のノウハウだけではなかったのだった。

また深夜に今にも壊れそうな木の机に向かい合って座っている。

そうして話をしている。上の電球がしばたいている中での話だ。虫も飛び交っているが気にはしない。

「アメリカはあれだ。製品に番号をつけている」

「番号をか」

「そうだ。それで品質を見分けられ易く、分類し易くしているんだ」

香川はこう森本に語っていた。

「それでチェックもし易くしている」  
「チェック!？」

これもまた森本には聞き慣れない言葉であった。それを聞くと共に目をしばたかせた。

「部品のチェックか」

「その通りだ。品質管理というらしい」

「品質管理か」

「前に言ったな」

今度は話を戻してきた。

「アメリカ軍の稼働率は我が軍よりもよかった」

「ああ、あの話か」

それは覚えている。だから納得する顔で頷くのだった。

「ああ、それだ。その秘密らしい」

「秘密か」

「アメリカ軍は製品をチェックしていたんだ」

またそれを言う。

「そうして不備があれば換える。そして番号を付けてチェックし易くする」

「それだったのか」

「それだ。これを入れれば全然違うぞ」

香川は言った。

「かなりな。どうだ」

「その導入か」

「品質管理だ」

今度は単語にして言い表した。

「それを入れると全然違う。俺はそう思う」

「よし。それならだ」

そして森本もそれに頷いた。彼もそれを信じるのだった。

「それで行くか」

「今はこんな有様だがな」

香川はここで今の日本のことを語った。敗戦の傷がまだ癒えてはいない。それによるダメージを思わずを得なかったのだ。

「絶対に。アメリカに勝つぞ」

「そうだ。絶対にな」

二人の言葉が重なった。心も。

「今度こそな」

「アメリカに今度こそだな」

「ソ連も退けてやる」

彼等も見えていた。その目はアメリカに対するのはまた違っていた。まさに敵を見る目であった。憎しみも恨みも含んだ禍々しささえあるものだった。

「何があってもな」

「その為だ」

香川は自分と同じ目になっている森本に告げた。

「やるぞ。いいな」

「よし。日本はまた立ち上がる」

森本もそれに応えて誓った。

「何があってもな」

「そうだな。負けてもそれで終わりじゃない」

「ああ。今度こそ勝つぞ、アメリカにな」

「世界に」

戦後間もない頃の話であった。彼等をはじめとした技術者達の敗戦の無念とそれからの努力がどうなったのかはもう言うまでもない。敗戦が終わりではなかった。それもまた新しいはじまりであったのだ。新たな戦いの。そしてそれは今も続いているのである。人の営みとして。

メカニク

2  
0  
8  
・  
3  
・  
8

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1943e/>

---

メカニック

2009年3月24日09時34分発行